様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：２１４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５００１５

研究課題名（和文）大正期日本における近代デザイン理念の形成：明治四十四年トリノ博参同と工芸振興運動

研究課題名（英文）A study on Japanese idea of promoting modern design and craft in the Taisho era: Special reference to Japanese participation in Turin International Exhibition in 1911

研究代表者
天貝　義教（Amagai, Yoshinori）

秋田公立美術大学・美術学部・教授

研究者番号：３０２７９５３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：平山英三の日記と評論を中心とする国内外の史料をもちいた文献資料の調査研究とトリノ市とローマ市における現地調査によって、明治４４年（1911）のトリノ万国博覧会参同と農商務省商品陳列館によって開催された第6回商品改良会との関係を考察した結果、大正初期の日本の工芸振興運動のなかに、美術工芸とはことなる一般工芸ならびに普通工業品の美的価値の向上を目指すデザイン理念があり、それが、昭和戦前期の工芸概念をめぐる議論に重要な基礎を提供し、その後の近代的なデザイン理念の形成につながることがあきらかになった。

研究成果の概要（英文）：Hirayama Eizo was dispatched to the International Exhibition held in Turin, Italy, as head of the Japanese Exhibition Committee in 1911. During the exhibition, Hirayama often visited Rome where the International Exhibition of Fine Art was held, and made short trips to many European cities, where he learned firsthand about many new industrial products. After returning to Japan in 1912, Hirayama, as chairman of the committee of the Japanese product improvement exhibition, published articles not only to report that the style of the current European industrial products for daily use was turning towards the new style that was characterized by simple form and soft color, but also to advise Japanese designers to move beyond Art Nouveau style and Secession style into a new Japanese style for products useful for daily life. Hirayama's criticism provided the basis for discussion about Japanese ideas of developing not industrial art but industrial design from the 1910s to the 1930s.

研究分野：デザイン史　美学　芸術学

キーワード：平山英三　長沼守敬　安田禄造　トリノ万国博覧会　ローマ美術博覧会　商品改良会　東京高等工芸学校　近代デザイン理念

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の日本におけるデザイン史の研究は、1950 年代の後半から 1960 年代のはじめに本格的にすすめられるようになった。それらの研究の多数は、いちじるしい工業化と西洋化がすすんだ第一次世界大戦後の 1920 年代の大正後期から昭和初期にかけて、日本における近代デザイン理念の形成がなされたとの観点にたっている。このような観点からは、たとえば昭和三十三年（1958）に発足した日本貿易振興会（JETRO）が、その発足直後に阿部公正氏を編集者とし小池新二氏を編集助言者として発行した JAPANESE DESIGN IN PROGRESS との表題がつけられた英文の日本デザイン史に代表されるように、大正年間に、造形芸術全般にかかわるヨーロッパのモダニズム運動が受容され、特にアール・ヌーヴォーにつづくセセッション運動と、セセッション運動を起源とする機能主義(functionalism）の導入がすすめられたとみなされている。さらに、機能主義の導入にともなって建築をふくむさまざまな生活用品における装飾の美的価値に対して、機能にもとづく形態の美的価値を全面的に優先させる新しい生活様式の探求がはじまり、大正十二年（1923）の関東大震災からの復興を契機に、いわゆる機能主義に特徴づけられたデザイン理念にもとづく生活環境全般の具体的な実現が飛躍的にすすめられたとみなされている。

以上のようなデザイン史の研究においては、大正年間のデザインに関する具体的な事項について、農商務省の商品陳列所を拠点とした商品改良会と図案及応用作品展覧会（後の工芸展覧会）の開催、文部省による東京高等工芸学校の開校と、その設置に指導的な役割をはたした安田禄造のウィーン留学と経済的工芸の主張などが、輸出振興策をふくむ工芸振興運動として注目されるとともに、「工業的考案」という表現によって意匠を規定することとなった大正十年（1923）の意匠法の改正がデザインに関する法制度の整備として注目されることとなる。

これらについては今日まで多数の研究がすすめられており、図案及応用作品展覧会・工芸展覧会、いわゆる農展・商工展についても、比嘉明子・宮崎清両氏による研究論文「図案奨励策としての農展・商工展の様相とその意義」（1995）にその詳細をみることができる。商品改良会ならびに大正十年(1923)の東京高等工芸学校の設立、さらに安田禄造のウィーン留学と経済的工芸の主張については、森仁史氏の『日本＜工芸＞の近代』（2009）に代表される充実した研究におおくのことを学ぶことが可能であり、大正十年意匠法については、特許庁による『意匠制度 120 年の歩み』（2009）から、その内容が読みとれる。しかしながら、明治初期に日本に導入され、明治二十一年（1888）に制定された意匠条例に反映していた応用美術の思想を視野にいれた一貫性をもって、日本における近代的なデザイン理念の形成過程の独自性を総合的に考察し解明したデザイン史的研究は未だ完成されてはいない。本研究は従来の研究にみられる空白をおぎなうものである。

２．研究の目的

本研究では、科学研究費助成研究「明治後期日本における工業的意匠概念と応用美術思想に関するデザイン史的研究」（基盤研究（Ｃ）課題番号 22615049）の研究成果にもとづきながら、今までの日本におけるデザイン史研究でほとんど取りあげられてこなかった、明治四十四年（1911）にイタリアのトリノ市において開催された万国博覧会への日本の参同に注目し、この万国博覧会への参同と当時の代表的な工芸振興政策のひとつである商品改良会との関係を考察することによって、明治末期から大正期の日本における近代デザイン理念の独自の形成過程の解明をおこなう。

明治四十四年（1911）のトリノ万国博覧会への日本の参同については、その概略を外務省外交史料館所蔵の外交文書ならびに伊太利万国博覧会出品協会の編集による『伊太利万国博覧会出品協会事務報告』(1912)から部分的に知ることができるが、本研究では伊太利万国博覧会出品協会の理事長として現地トリノに派遣された平山英三による未公開の自筆ヨーロッパ滞在日記を資料として使用し、博覧会参同についての詳細を平山の動向からあきらかにする。

平山英三は明治初期に日本人としてはじめてウィーンのクンストゲヴェルベシューレ（現ウィーン応用美術大学）に学び、明治後期から大正初期にかけて応用美術の思想にもとづきながら意匠行政とともに工業図案の高等教育にも従事し、明治四十四年（1911）のトリノ博参同の前後に商品改良会の審査長をつとめ、トリノ博からの帰国後、博覧会をとおして体験したヨーロッパの最新の応用美術品の意匠図案に関する論説を発表し、大正元年（1912）八月には松岡寿・手嶋精一らとともに農展などの図案振興策をふくむ政府による工芸振興策を提言していた。

平山の日記には明治四十三年（1910）十二月から明治四十五年（1912）二月までヨーロッパ渡航と博覧会についての見聞が一日も欠落することなく記録されており、そこからは博覧会における各国の出品物の意匠図案に関する詳細な感想とともに、博覧会に関連してローマを筆頭にパリ、ミュンヘン、ウィーンなどヨーロッパ大陸の主要都市を訪問したことが読みとれる。とりわけウィーンでは当時現地のクンストゲヴェ

ルベシューレに留学してヨーゼフ・ホフマンのもとで学んでいた安田禄造がウィーン滞在中の平山を数日にわたって訪問していたことが読みとれる。

平山がトリノ博をとおして獲得したヨーロッパの工芸品（応用美術品）の意匠図案についての認識は、帰国後に発表された商品改良会の審査批評をはじめとして工芸振興運動に反映されていたと考えられる。そこでは当時の海外および国内向けの日本製の洋風家具・陶磁器・漆器などに流行していたアール・ヌーヴォーとセセッション様式模倣へのきびしい批判とともに、歴史的な様式の模倣ではない、実用的な形態と変化に富む装飾を兼備した日本製品固有の独自性の追求と実現が主張されていた。

平山は大正三年（1914）に生涯をとじており、大正五年（1916）から新聞や著作で発表された安田禄造の経済的工芸の主張ならびに大正十年（1921）の意匠法の改正と東京高等工芸学校の開校は、平山の死後の出来事ではあるが、これらは、トリノ博参同の経験から獲得されたヨーロッパの意匠図案の変化についての認識にもとづく平山の主張の延長線上に位置づけられると考えられ、その解明も本研究でおこなう。

３．研究の方法

本研究は下記のような計画と方法によっておこなった。

（１）平山英三の自筆ヨーロッパ滞在日記のデジタル資料化と内容の分析

（２）トリノ万国博覧会関連史料の収集と内容の分析

（３）イタリア共和国トリノ市における現地調査

（４）平山英三の自筆ヨーロッパ滞在日記にみられるローマ万国博覧会に関する記述の分析

（５）ローマ万国美術博覧会に関する資料の収集と分析

（６）イタリア共和国ローマ市における現地調査

（７）商品改良会に関する資料の収集と分析

上記の（１）の実施内容では、三冊の小型手帳にしたためられた日記のゼロックスによる白黒複写をデジタル・データ化し、（４）の実施内容の終了後に、全文をインターネット等で一般に公開可能な状態にする予定であったが、日記の所有者の意向により、デジタル化した日記の使用については、その内容を分析・考察した学術論文における部分的な引用にとどめることとした。

（２）、（５）、（７）の実施内容は主として国内外の公共図書館における公文書ならびに文献資料、とりわけ現地で発行された博覧会に関するガイドブックならびに雑誌等の収集をおこない、その内容を精査したものである。（３）、（６）の実施内容は、（２）、（５）、（７）の計画にもとづいて収集した公文書ならびに文献資料にみられる記述内容と現地における調査との比較検討をとおして、トリノ万国博覧会ならびにローマ万国美術博覧会への日本参同とともに平山に代表される日本人の現地における動向について、そのデザイン史的意義をあきらかにしたものである。

４．研究成果

（1）明治 44 年（1911）のトリノ万国博覧会とローマ万国美術博覧会への日本の参同と明治末期から大正初期の代表的な工芸振興政策のひとつであった商品改良会との関連について、平山英三の自筆ヨーロッパ滞在日記を中心とする史料と文献資料の考察をおこなうとともにトリノならびにローマの現地調査をおこなった結果、当時の工芸振興運動のなかに、美術工芸とはことなって実用性を重んじる一般工芸および普通工業品の美的価値の向上をめざすデザイン理念があったことがあきらかになった。さらに、この理念が、トリノ万国博覧会とローマ万国美術博覧会への参同を通じて獲得されたヨーロッパにおけるアール・ヌーヴォー様式とセセッション様式からの変化に対する認識にもとづいており、昭和初期の美術工芸・産業工芸・民芸にみられる工芸概念の議論へとつながっていることがあきらかになった。

①出品協会の理事長として約一年にわたりイタリアに派遣された平山英三の日記には、平山が、博覧会開催地のトリノ市ならびにローマ市にとどまらず、ウィーンをはじめとしてヨーロッパ大陸の主要都市に滞在し、自動車・バスなどの新交通機関から服飾・生活用品にいたるまで最新のヨーロッパ製品を体験したことが記録されている。またウィーンでは現地に留学していた安田禄造が平山を出迎えていたことが読みとれる。

②平山の感想によれば、万国博覧会開催当時のヨーロッパの建築をふくむ応用美術品の様式にはアール・ヌーヴォー様式からの変化がみられるが、そのような変化は、当時の国際的な芸術雑誌のひとつである STUDIO 誌の記事においても指摘されており、1910 年代のヨーロッパの主要都市では、すでにアール・ヌーヴォー様式の流行は沈静化しており、形態ならびに装飾の新規性を追求するさいに、幾何学的な厳格さ、民族的・地域的な独自性にねざした伝統に対する関心がたかまっていた。

③博覧会開催当時、日本側はトリノ市内に２棟の住宅を賃借したが、トリノ市における現地調査をおこなった結果によれば、一棟は 1890 年代末の世紀末に、もう一棟は 1900 年代初頭に建設された住宅であり、それぞれ建設当初のファサードの装飾を保持していることが確認された。世紀末に建設された住宅のファサードの装飾はウィーン・セセッション風の様式によって特徴づけられており、1900 年代初頭に建設された住宅のファサー

ドの装飾は、歴史主義的様式を想起させながらも厳格な構成によって特徴づけられていることがあきらかになった。またローマにおける現地調査では、当時のイギリス・パビリオンならびにイタリア・パビリオンが博覧会会場地にほぼ当時の外観を残して存続していることが確認された。当時の国際的雑誌STUDIO誌の記事によれば、美術博覧会において注目すべきパビリオンとして、ヨーゼフ・ホフマンの設計によるオーストリア・パビリオンが評価されているが、そのデザインの特徴は、収集した資料のひとつであるオーストリア・パビリオンの解説書である‘ROM 1911 INTERNATIONALE KUNSTAUSSTELLUNG ÖSTERREICHISHER PAVILLON’(1911年発行)によればセセッション風の装飾を部分的にのこしながらも、全体が簡素な幾何学的様式によって特徴づけられていることが確認できた。

④明治45年（1912）初頭にイタリアから帰国した平山は大正元年（1912）の第六回商品改良会の審査委員長として、当時の日本国内で流行していたアール・ヌーヴォーならびにセセッション様式の模倣による製品図案を厳しく批判した。これは上記のようなヨーロッパにおける直接的な体験にもとづいていたことがあきらかになった。商品改良会は大正期には農商務省図案及応用作品展覧会（いわゆる農展）へと発展的に解消するが、この展覧会は、平山をはじめとして松岡寿などの提言にもとづいており、そこでは、美術工芸とはことなる実用性を第一に重視する一般工芸品と普通工業品の意匠図案の美的価値の向上が目的とされていた。こうした大正期の工芸振興運動に関して、トリノ万国博覧会参同を通じての平山のヨーロッパ体験と、それにもとづく平山のアール・ヌーヴォーならびにセセッション様式の模倣批判は看過できない重要な役割をはたしていたとデザイン史的に意義づけられる。

（2）平山英三の自筆日記の内容分析とトリノ市ならびにローマ市における現地調査の結果、出品協会の理事として平山とおなじくイタリアに派遣されていた彫刻家の長沼守敬が平山とトリノのみならずローマにおいても博覧会開催期間中ならびにその前後の期間に、きわめて親しく交流を深めていたことがあきらかになった。トリノ万国博覧会ならびにローマ万国美術博覧会に関連した従来のデザイン史・工芸史・美術史の研究においては、両人の交流はまったく取りあげられてこなかったことであり、その歴史的な意義については今後の当該分野での研究の発展が期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 天貝義教、L.B.アルベルティの『絵画論にみる視的ピラミッドとその切断に関する研究（１）』、秋田公立美術大学紀要、査読無、Vol.2, 2015, pp.1-10
② Yoshinori Amagai, Pioneers of Japanese Design in the Meiji Era, The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory, 査読有 Vol.1, 2016, pp.19-28.
③ 天貝義教、明治44年（1911）羅馬万国美術博覧会と平山英三、秋田公立美術大学紀要、査読無、Vol.3, 2016, pp.3-14
④ Yoshinori Amagai, Japanese concept of Kogei in the period between the First World War and the Second World War, 査読有, Making Trans/National Contemporary Design History, Vol.1, pp.105-109.

〔学会発表〕（計２件）

① Yoshinori Amagai, Pioneers of Japanese Design Education from Bijutsu to Kogyo Zuan in the Meiji Era, First Asian Conference of Design History and Theory 2015 OSAKA, 2015年10月23日、大阪大学
② Yoshinori Amagai, Japanese concept of Kogei in the period between the First World War and the Second World War, 10th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, 26th October 2016, Department of Industrial and Commercial Design, National Taiwan University of Science and Technology, Taipei, Taiwan.

〔図書〕（計１件）

① 天貝義教　他、竹林舎、西洋近代の都市と芸術　８　ウィーン、2016、541（180-204）

６．研究組織

(1)研究代表者

天貝　義教（AMAGAI Yoshinori）
秋田公立美術大学　美術学部・教授
研究者番号：３０２７９５３３